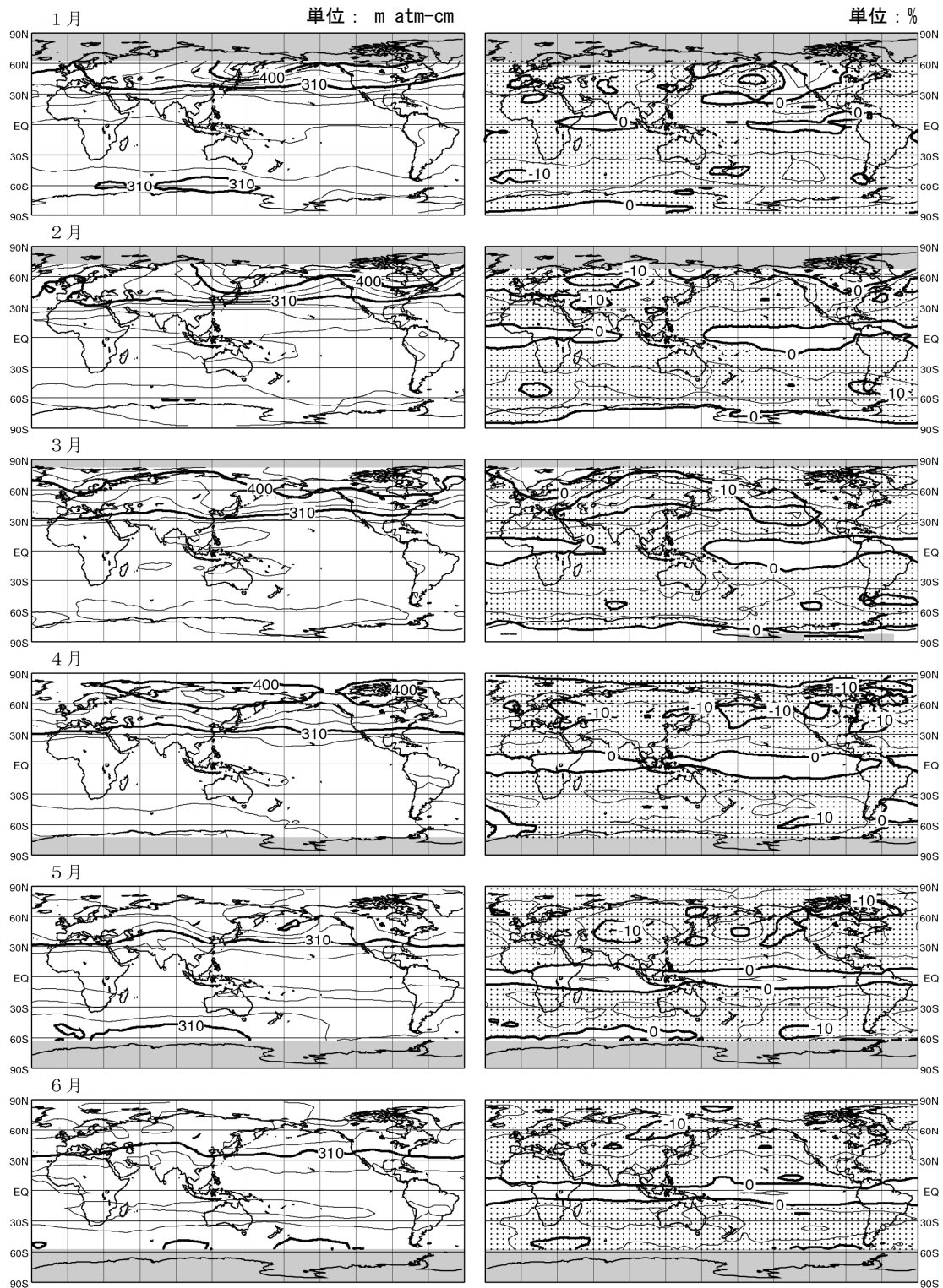


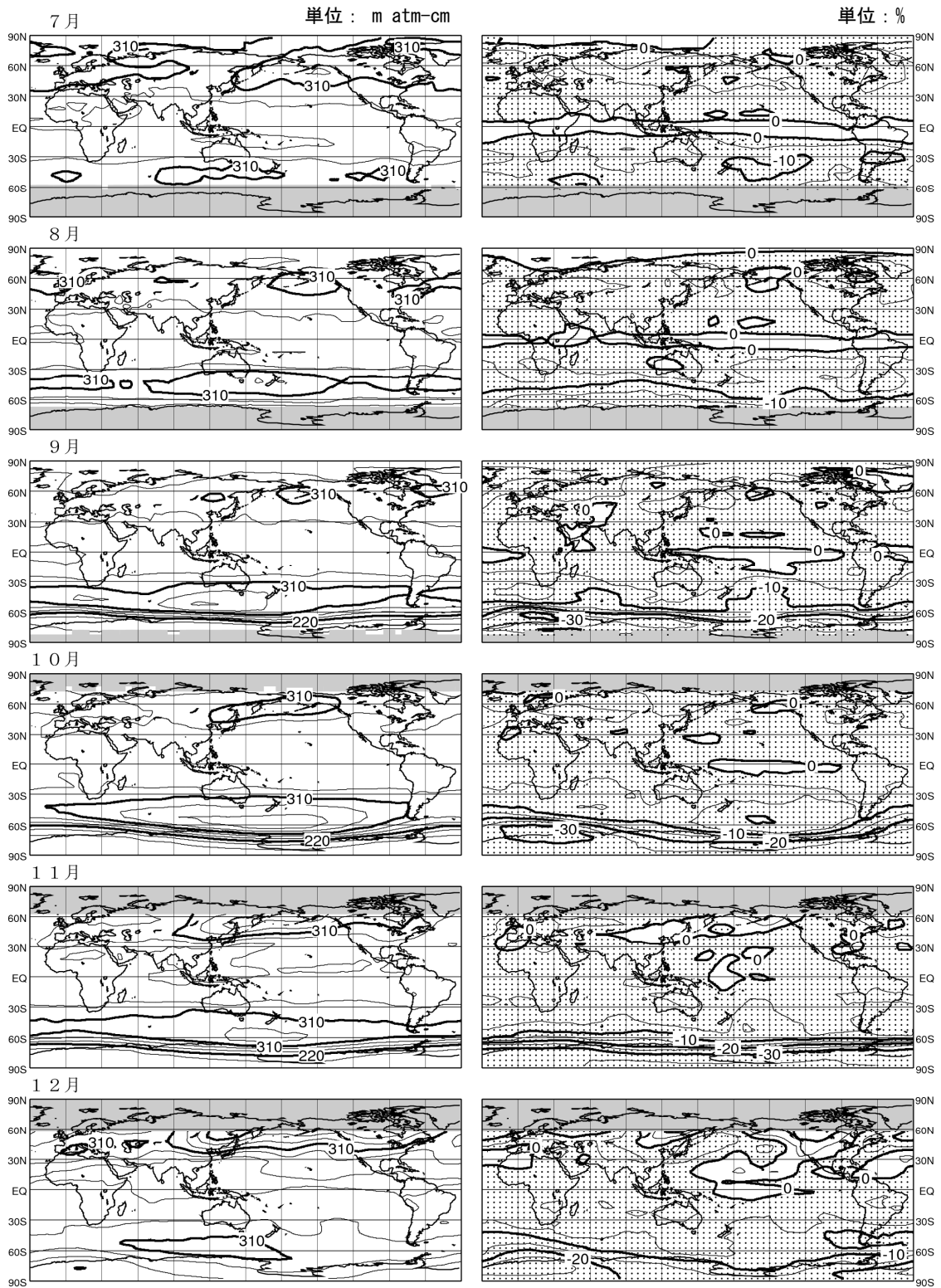
資料

資料1 月平均オゾン全量・比偏差 全球分布図（2008年）



資料1(1)：月平均オゾン全量・比偏差の全球分布図（2008年1-6月）

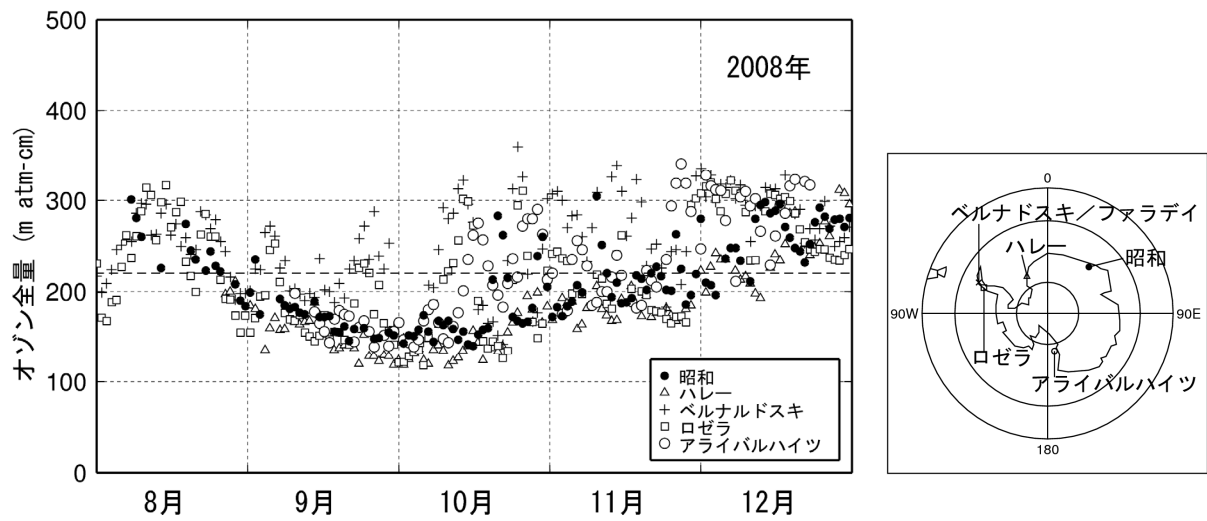
等値線間隔は、月平均オゾン全量（左列）については30m atm-cm、比偏差（右列）については5%。陰影部は太陽高度角の関係で観測できない領域。点域は参照値より少ない領域。NASA提供の衛星データをもとに気象庁で作成。比較の基準である参照値は1979～1992年の月別累年平均値。



資料 1 (2) : 月平均オゾン全量・比偏差の全球分布図 (2008年7-12月)

等値線間隔は、月平均オゾン全量 (左列) については30m atm-cm、比偏差 (右列) については5%。陰影部は太陽高度角の関係で観測できない領域。点域は参照値より少ない領域。NASA提供の衛星データをもとに気象庁で作成。比較の基準である参照値は1979~1992年の月別累年平均値。

資料2 南極各国基地におけるオゾン全量の推移（2008年）

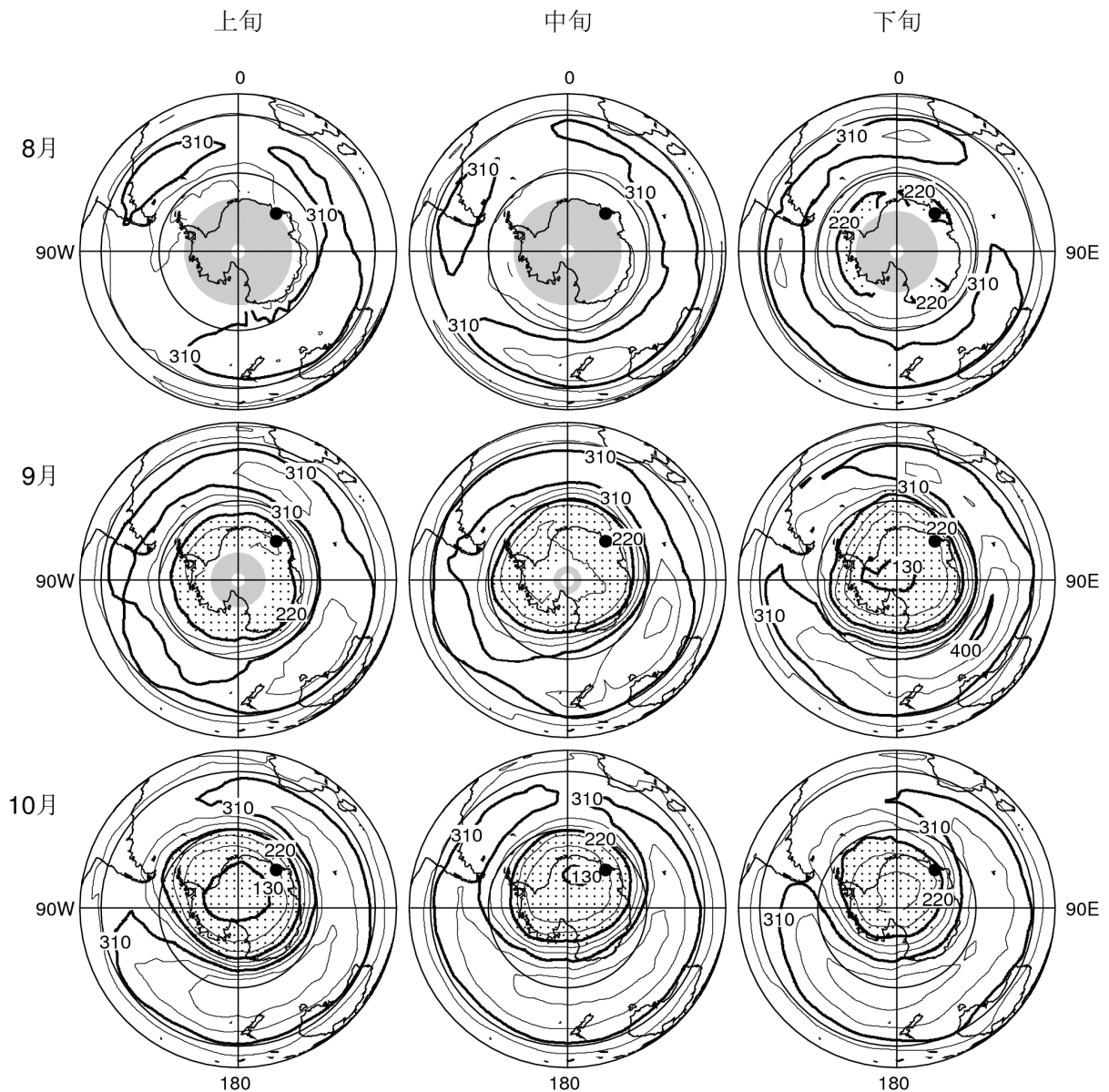


資料2：南極各国基地におけるオゾン全量の推移（2008年）

昭和基地（●印）、ハレー（△印）、ベルナルドスキ/ファラデイ（+印）、ロゼラ（□印）およびアライバルハイツ（○印）における2008年8～12月のオゾン全量。ハレー、ベルナルドスキ/ファラデイ、ロゼラの観測値はShanklin博士(英国南極研究所)提供。アライバルハイツの観測値はClarkson博士(ニュージーランド水・大気研究所)提供。オゾンホール目安である220 m atm-cmを破線で示した。

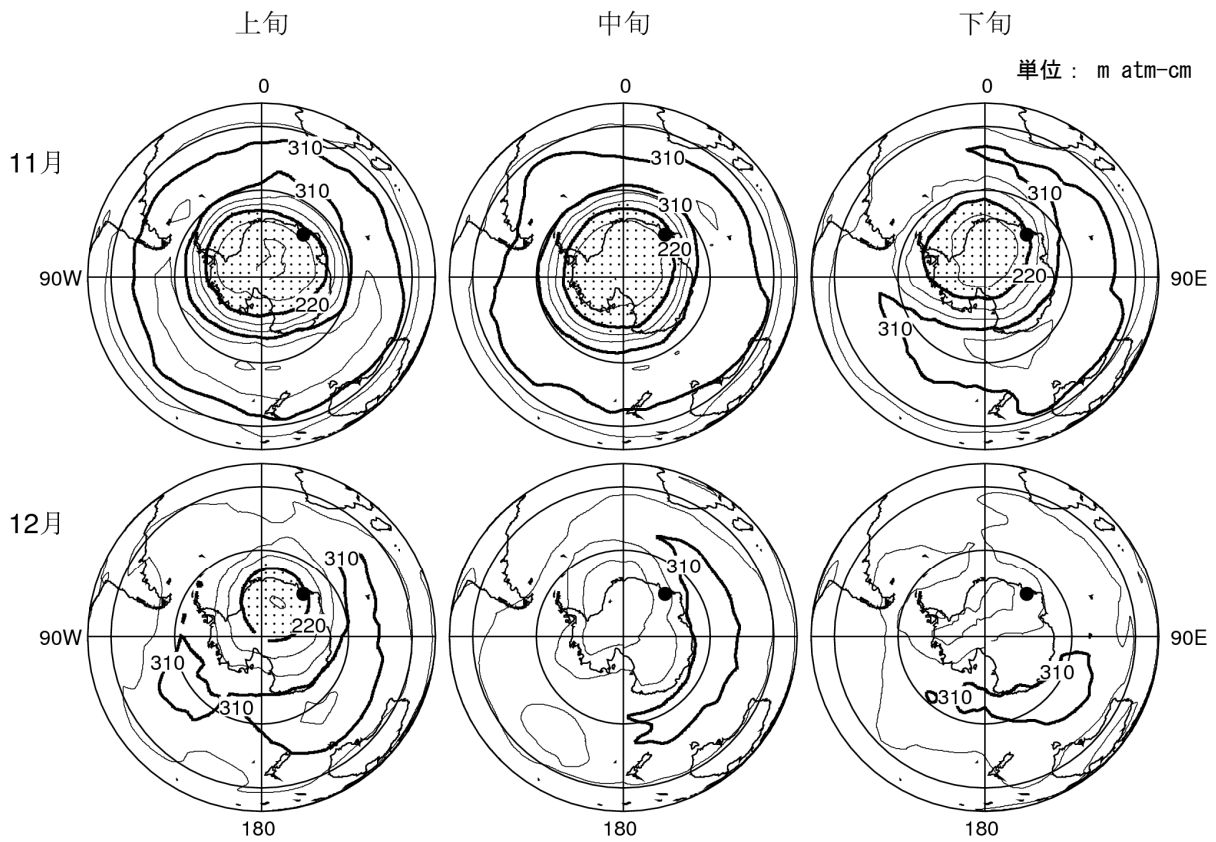
資料3 南半球旬平均オゾン全量分布図 (2008年8~12月)

単位: m atm-cm



資料3(1) : 南半球旬平均オゾン全量分布図 (2008年8~10月)

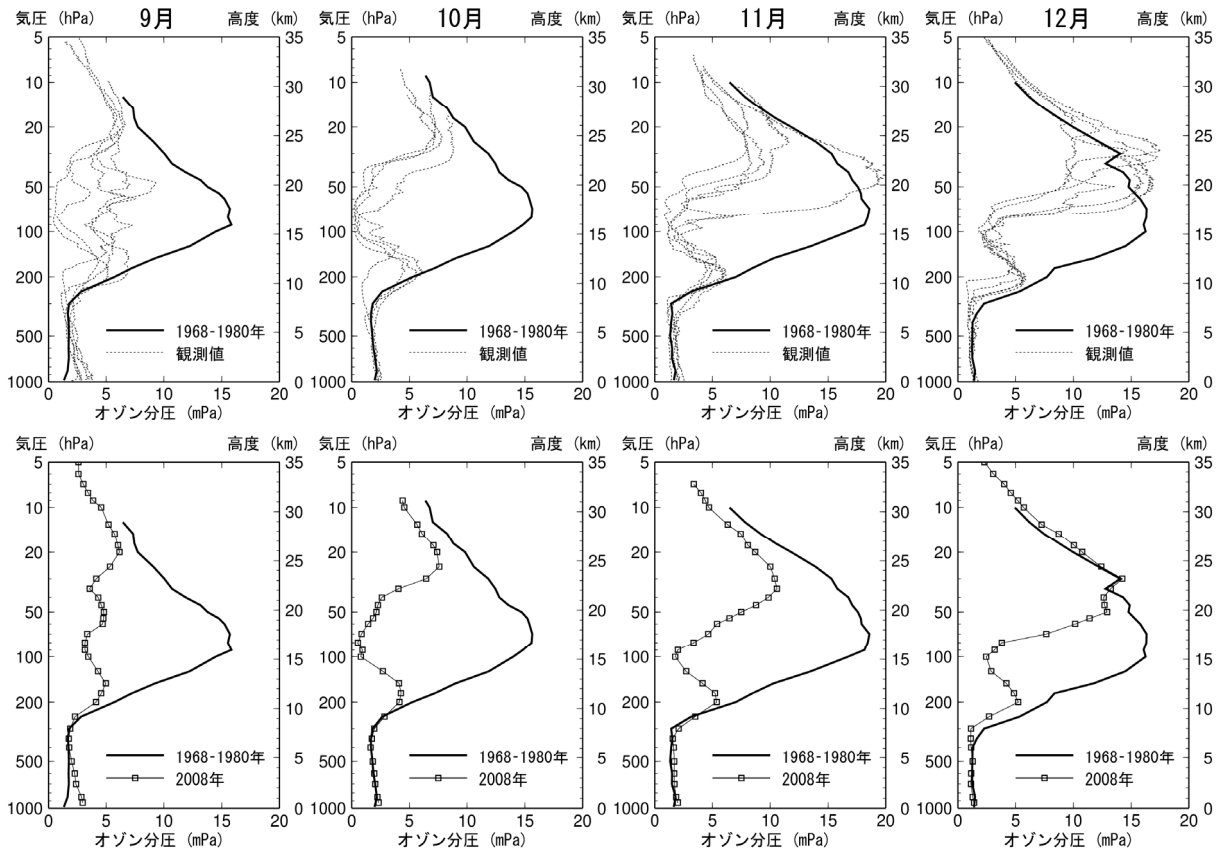
上段から8月、9月、10月の旬平均値。左列は上旬、中列は中旬、右列は下旬。点域は220m atm-cm以下の領域。南極点を中心とする陰影部は太陽高度角の関係で観測できない領域。等値線間隔は30m atm-cm。NASA提供の衛星データをもとに気象庁で作成。なお、観測には太陽光を用いることから、極夜のため観測データが取得できない領域がありオゾンホールを目安となる220m atm-cmを下回る場合でも、図に表現されない場合がある。●印は南極昭和基地。



資料3(2)：南半球旬平均オゾン全量分布図（2008年11～12月）

上段から11月、12月の旬平均値。左列は上旬、中列は中旬、右列は下旬。点域は220m atm-cm以下の領域。等値線間隔は30m atm-cm。NASA提供の衛星データをもとに気象庁で作成。●印は南極昭和基地。

資料4 南極昭和基地における月別オゾン高度分布 (2008年9~12月)

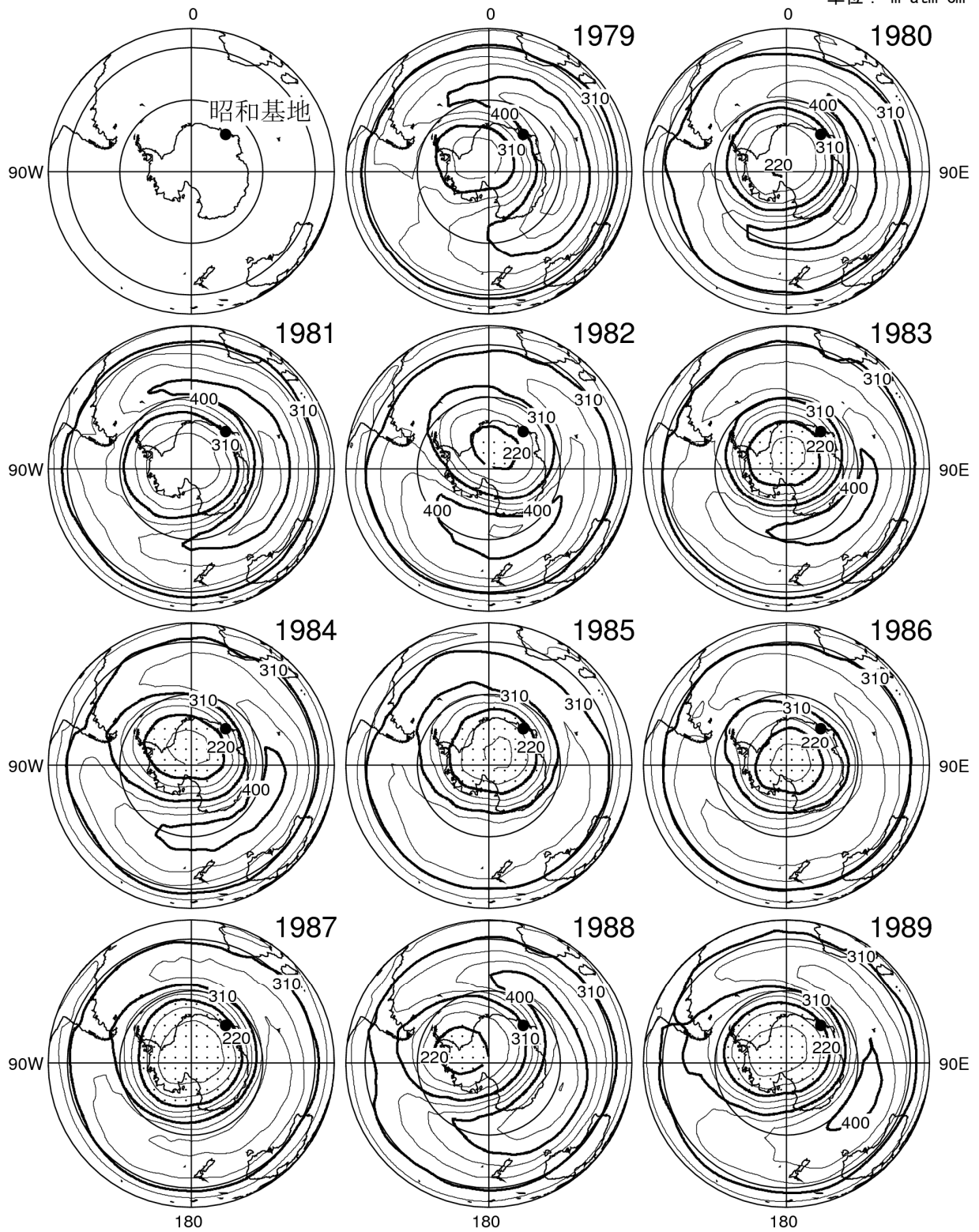


資料4：南極昭和基地におけるオゾン高度分布

2008年9~12月のオゾンゾンデ観測結果。上段：太実線はオゾンホールが出現する以前（1968~1980年）の平均オゾン高度分布。細実線は2008年の個々の観測結果。下段：太実線は上段に同じ。-□-は2008年の月平均オゾン高度分布。

資料5 10月の南半球月平均オゾン全量分布図（1979～2008年）

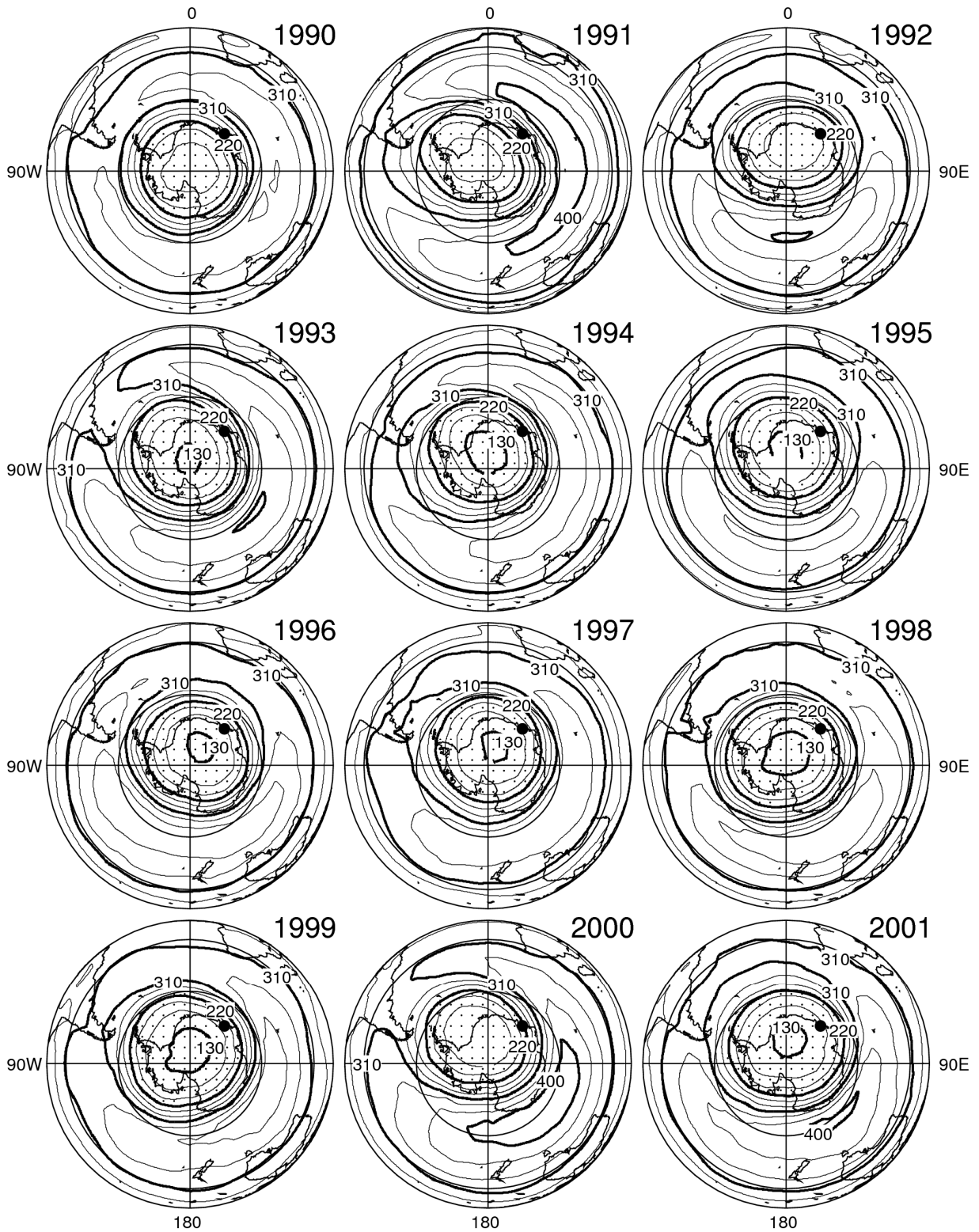
単位：m atm-cm



資料5 (1) : 10月の南半球月平均オゾン全量分布図（1979-1989年）

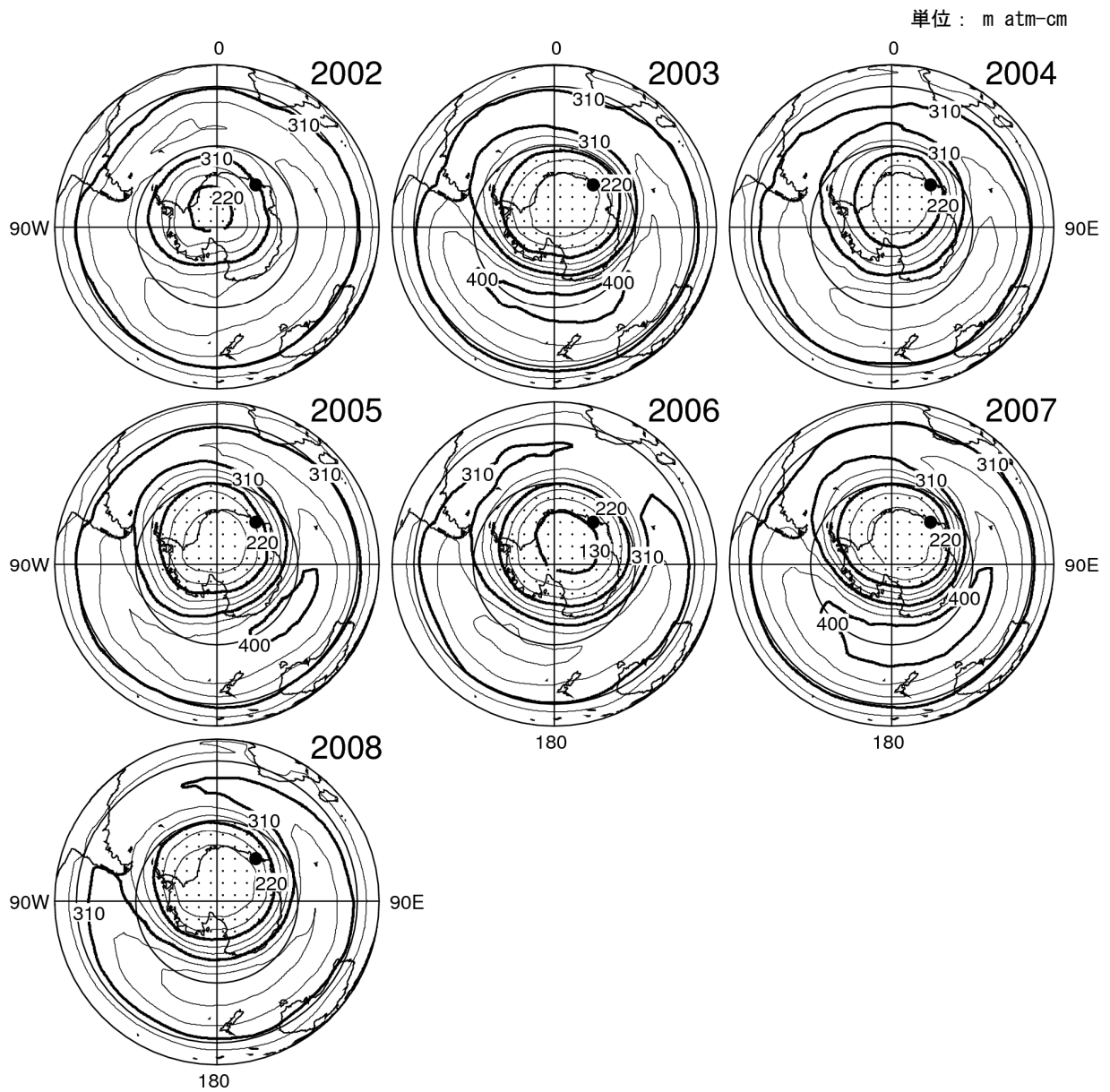
等値線間隔は30m atm-cm。NASA提供のTOMSデータをもとに気象庁で作成。点域は220m atm-cm以下の領域。●印は南極昭和基地。

単位：m atm-cm



資料5(2)：10月の南半球月平均オゾン全量分布図（1990-2001年）

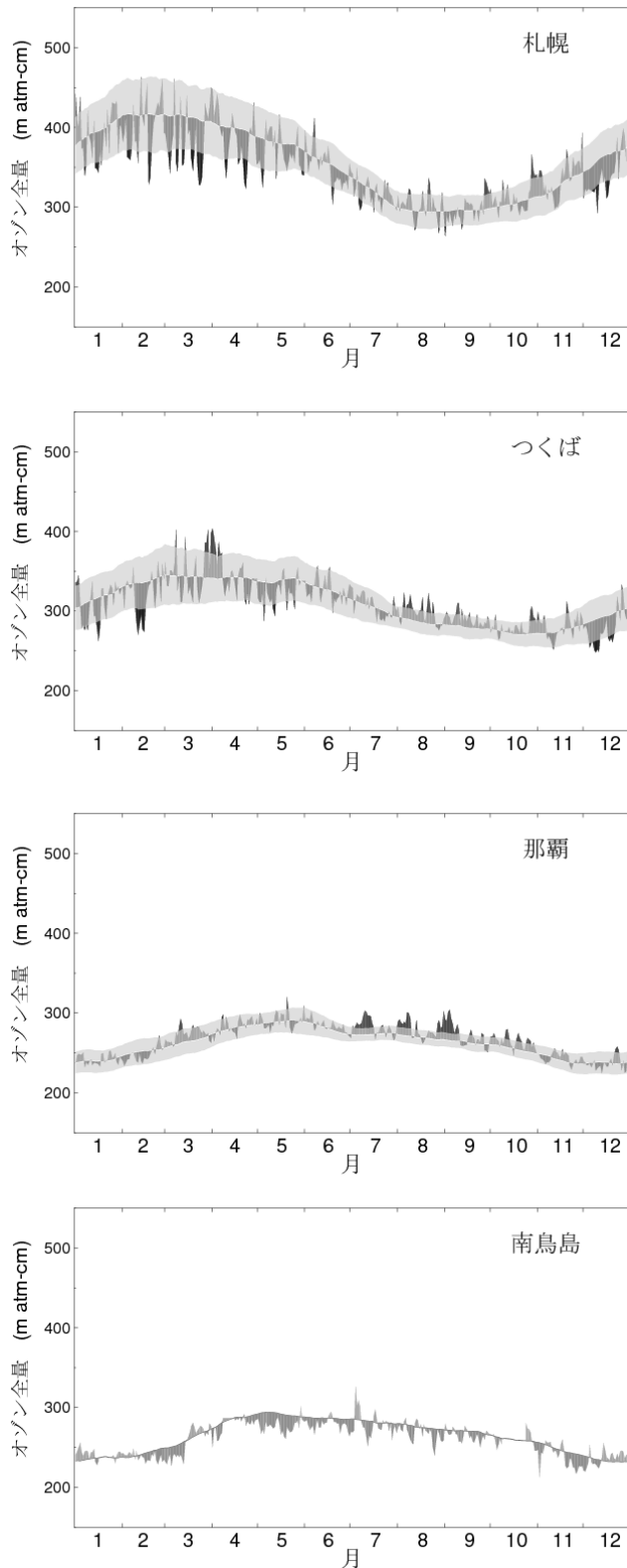
前ページから続く。1995年については、NOAA提供のSBUV/2のデータを用いて作成。●印は南極昭和基地。



資料5 (3) : 10月の南半球月平均オゾン全量分布図 (2002-2008年)

前ページから続く。2005年以降については、NASA提供のOMIデータを用いて作成。●印は南極昭和基地。

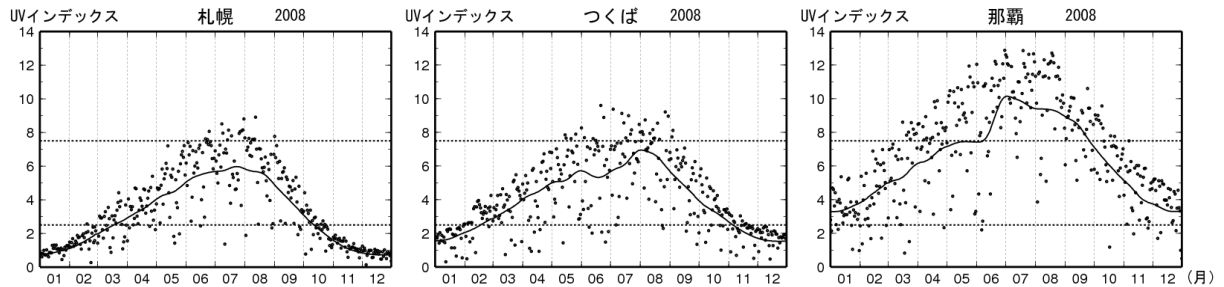
資料6 国内のオゾン全量日代表値（2008年）



資料6：国内のオゾン全量日代表値（2008年）

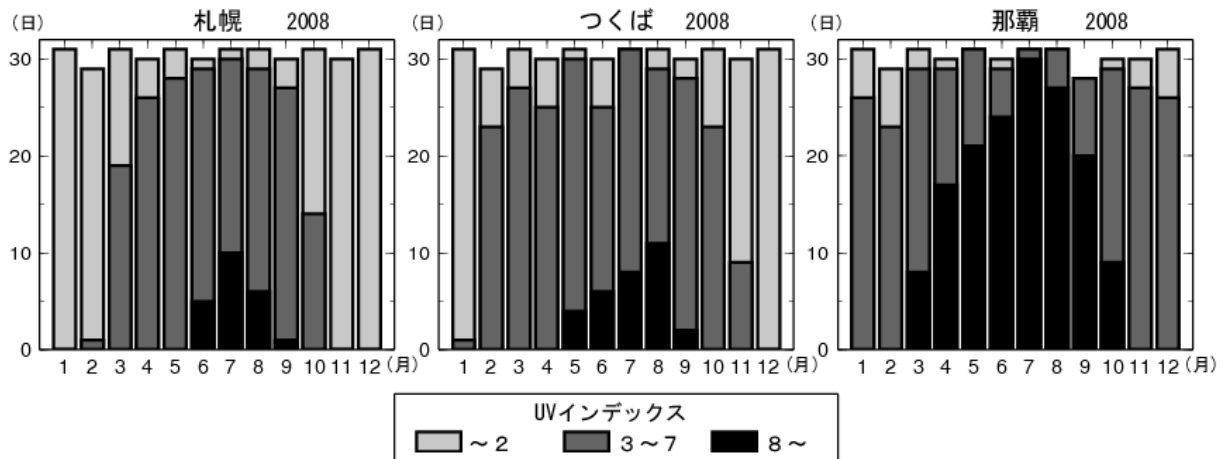
国内4地点におけるオゾン全量日代表値の2008年の推移。上から、札幌、つくば、那覇、南鳥島。参照値は、札幌とつくばは1971～2000年、那覇は1974～2000年、南鳥島は1994～2007年の平均値。陰影は同期間の標準偏差（南鳥島は観測期間が短いので算出しない）。なお、日代表値とはその日に行われた全ての直射光観測および天頂光観測の中で最も観測精度が高いと判断される観測値であり、通常は最も雲の影響が少ない直射光観測から選ばれる。

資料7 国内の日最大UVインデックス（2008年）



資料7-1：国内の日最大UVインデックスの推移（2008年）

●印は国内3地点（札幌、つくば、那覇）における日最大UVインデックスの推移。実線は日最大UVインデックスの累年平均値（1991（つくばは1990）～2007年）。点線は資料7-2の階級別出現日数で使用する階級の区切り。



資料7-2：国内の日最大UVインデックスの階級別出現日数（2008年）

国内3地点（札幌、つくば、那覇）における日最大UVインデックスの階級別出現日数を月別に示す。台風、障害等による欠測を除いている。